

THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, April 30th, 1958, No. 314.

# 關西大學學報

昭和33年4月 第314号

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可  
昭和三十三年四月三十日発行（毎月一回三十日発行）  
通巻三一四号



さくら 咲く（千里山学園）

關西大學學報局

私は非才その任に非るに拘らず三たび本学学長の重責にあたることになりましたことは、誠に此上もない光栄と存する次第であります。それと同時にその責任の極めて重大であることを痛感せざるを得ません。

初めて私が本学学長の重責を荷いましたのは、昭和二十五年、わが学園が新制に移行して余り間のない時でありました。当時は法文学舎は木造の旧館で、既に所々腐朽を見せ、早急に改築を要する状態であり、図書館と経商学舎は現在のコンクリート建の姿で立つていましたが、既に狹隘を告げ、速かに拡張を必要とするのみでなく、経商学舎の如き

## 就任の辞

学長 岡野留次郎

は、所々雨漏さえあり、床面の沈下等、修理の必要が痛感されるという有様でありました。只大学院修士課程の成立と共に、大学院教室が現在の木造の姿で、新しく建築されていきましたが、それも甚だ不完全な状態で、既に早や多少の修理さえ要する有様でありました。当時の理事者は、先ず差当り大学院研究室の築造を必要とし、続いて法文学舎の改築、図書館の増築、経商新校舎の増築等を策し、着々その工を進めようとしたが、その半ばを實現し得たに過ぎないうちに、理事陣容の改選となり、ただ最後に今日の大学外苑の買収とその一隅における幼稚園の設立によつて将来の発展の基礎を置き得たのみ

で、後継理事陣営に後事を托する外ない状況となつたのであります。革新的な評議員選挙制度によつて新しい理事の進出と共に、当初のプランは着々実行に移され、法文学舎の改築は完成し、図書館の増築は竣工し、仮体育館の移転と共に第三学舎が大規模に完成を見、西研究室の買収と整備、劃期的な多数図書書の購入、構内道路・運動場・芝生の整備、植樹、造園の完成、附属高等学校の外苑移転、天六学舎の増改築、附属体育館の新築、学舎屋内設備の完成、千里山及び天六両学舎附属の学生食堂、医务室その他学生の厚生及び自治活動に必要な諸施設の改善等、誠に目まぐるしい施設の発展整備がなされ、

関西大学は全く昔日の

面目を一新したのであります。その間日夜を分たぬ経営理事者の努力と奮闘には、全く感

謝の外ない次第であります。更に他方内部的には諸種の規定の確立においても誠に目ざましい成果が上り、従来とかく茫漠たる未分化状態に低迷し何人も容易に革正し得なかつた本学の諸規定は、ほぼその大綱が確立され、漸く明確に分化した形式を整え得るに至つた次第であります。殊に画期的と思われることは、校友の間から、今次の新校舎増改築のために、数千万の応募寄附金を得たと云う事実であります。ところで本学には従来この種の美挙は余り耳にする機会がありませんでした。私の学長在任中、寄附保険の企劃が成立したことは事実であります。果してどれだけの実績を挙げ得たかを私は知悉

していません。校友が母校学園のためにその淨財を捧げることは、多くの私学に見られる美わしい現象であります。遺憾ながら本学には従来余り多くその例を聞かなかつたのであります。これには種々の原因があつたことと思われませんが、今たとえ決して多いとは云えないまでも、数千万の寄附金が校友の間から集まつたということは、何と云つても本学園のために衷心から慶賀しなければならぬ事実だと存じます。何故なら、これこそ校友の母校愛の純真なあらわれであるからであります。わが学園は初めて校友の愛する母校となり、校友がその卒業生たることを自らの誇りとし得るといふ確信の芽生えた証拠であるからであります。

かくして、わが関西大学は過去七十年の長い歴史と伝統を閲したとはいへ、校友が真にわが母校として誇り得る形態に、今や漸く到着しつつあると云つて過言ではありません。わが学園は今次更に工學部の新設によつて、綜合大学實現への一大理念に向つて一層大きな躍進を遂げようとしつつある重大なる時機に直面して居ります。この時に當つて真にわが学園の内容を充実し、天下の私大として東都に誇る早稲田・慶応の声価に勝るとも劣らぬ実力を發揮することは、本学園に直接職を奉ずるわれ等全教職員に双肩にかかつた重大な責任であります。私は不敏その任ではありませんが、深く自戒自肅してこの重責の万一に応えたい覚悟であります。元来私は昭和二十五年の学長就任以来、自己の責任として学内人事の充実を志し、校友間の熱望に應えて人材の招致と研學精神の昂揚に努めたのであります。人事

に関しては、学舎の建築などとは異り、相手が人間である関係上、単に資金と資材と技術で事足りるというわけには参らず、種々難航を極めました。幸い当時本学は大学院に新しく博士課程を設置するということでも鋭意人材の招致に努めた次第であります。そのかいあつて幾分その念願を達成し得たのでありますが、しかも尚決して充分とはいえず、従つて博士課程設置の認可を得るには並々ならぬ苦心を強いられる結果となり、当初は文学研究科の二専攻を除いては、法学部にも経商学部にも許可は次年度に延期せられる情勢濃厚となり、当初の出願年度内に許可を得ることが殆んど絶望の状態であつたのでありますが、多数同僚の方々の応援を得て、最後の努力をつくした結果、遂に今日の大学院博士課程の成立を

見たのであります。しかしその際附せられた種々の条件の中、必ずしも今日未だ充分満たされてはいないものもあるのは遺憾であり、われわれとしては今後大いにこの点に努力を傾注しなければならぬのではないかと考える次第であります。大学の本質的な発展は申すまでもなく教授陣容の充実であり、学生資質の向上であります。いかに学舎が輪奐の美を誇るうとも、いかにその施設が完備しようとも、これを利用して人材を得なかつたならば、決してその実効を發揮し得ないのであります。わが学園は外観の整備と共に漸く人材も集りつつあります。併し天下の秀才争つて本学園に集まるといふ状態に至るには、尚甚だ道遠しの感が深いのであります。学界に偉業を打立てる碩学の輩出するよう、又社会各方面において、人類文化の発展のため、或は人類の永遠の平和幸福を招来するために、偉大な貢献をなし得る多数の人材が生れ出るよう、われわれは攻学の精神を昂揚しなければなりません。われわれ自ら自肅自戒して、一世を指導し得る巨人偉傑の出るよう教育に専念しなければなりません。かくして初めてわれわれは本学園の使命を達成し得るのであり、社会文運の発展に寄与し得るのであります。



入学式で告辞する岡野学長

希くは多数の本学関係者各位！この私の表情に御同情下さいまして今後絶大な御協力と御後援を賜わるよう心から御願ひ申し上げます。

(教授、文学博士)

## 学内報

### 関西大学工学部増設認可

本学では法・経・文・商の文科系各学部の完備した今日、さらに理工科系学部の増設が数年前より要望されていたが、まず工学部設置を昨年九月二十七日の臨時評議員会で可決、同月三十日付で文部大臣に認可を申請していたところ、本年一月十日付をもつて左の通り文部大臣より認可があつた。

校大十七号

学校法人 関西大学

昭和三十三年九月三十日付で申請のあつた  
関西大学工学部増設のことは、下記のとおり認可  
可します。

昭和三十三年一月十日

文部大臣 松永 東

記

1、増設学部		入学定員	総定員
工学部	三〇名	一、一八〇名	
機械工学科	八〇名	三〇名	
電気工学科	八〇名	三〇名	
化学工学科	八〇名	三〇名	
金属工学科	八〇名	三〇名	
3、修業年限	四年		
4、開設年次	第一年次		
5、開設時期	昭和三十三年度		

(なお認可書は要点のみに留めました)

ここに、昭和三十二年度の栄ある学士証書授与式に列し、十六ヶ年に渉る永い学徒生活を恙なく終えてその最後の光栄ある地点に立つておられる関西大学新卒業生の諸君に対し、心からなる祝意を表します。これと同時に、その子弟の今日あることを待ち侘びていられたであろう父兄の方々にも、同様の祝意を表します。

不徳非才にもかかわらず、母校関西大学の学長として学士証書授与式に臨み告辞を述べる機会に恵まれたこと既に八回、その度毎に、この告辞こそ一生



## 告 辞

— 新 卒 業 生 諸 君 へ —

学 長 岩 崎 卯 一

に只一度のものと考えて、一年中寝ても覚めてもその構想に耽つて参りました。由来一大学の学長職の仕事は多事であり又多端でもあります。激しい学長職の渦巻の中にある時には、自らの力足らざるために、また自らの徳の薄いために、事志と違ふことが多く、しばしばその任から逃れたいと思ひ乍らも、毎年春三月に巡り来る学士証書授与式における学長としての告辞に思いを致す時、勇気新たに加わり、崩ずれ勝ちな自分の心を今日まで支えて参りました。何となれば、一学の長はこの日の告辞にこそ自己の全生命を賭けねばならぬと堅く信じていたからであり

ます。ところが、今度だけは自らの姿を榮ある新学士諸君の前に現わすことが出来なかつたのを、千秋の恨事と致します。本年一月から心身の異和を覚えておりましたが、大学における学長職の忙しさに、己れの健康を顧みるとまもなく、しばしば倒れながらも頑張つて参りました。十年来私の健康を見守つていた居住地の主治医が、二月十六日の診断で「疲労の結果による心臓の異状を認めるので、即刻入院して加療しなければ今後の状態は保証し難い」と厳しく忠告し、同時に関西大学の理事会代表にもその

旨を自身で通知しました。そこで、山積する大学の懸案事項に心を残しながら、主治医の恩師京都大学医学部教授三宅儀博士の診断を受けることとなり、二月十七日京都大学附属病院三宅内科に入院することになりました。自分では格別重いと雖も思つていませんでしたが、診断の結果最低三ヶ月の入院加療を勧告され、当分の間は面会謝絶で絶対安静を保持するように命ぜられたので、やむを得ず病院内の床上からこの告辞を贈る事になりました。実に残念でもあり又申訳ないと思つております。

切て、私が自ら学士証書授与式に臨むことができ

ますれば、次の三つの事を、諸君へ饒けの言葉として申述べたいと考えておりました。それは——  
一、いくら汲んでも涸れない友情  
二、いくらたたかれても屈れない闘魂  
三、どんな境遇にも曇らない良心  
の三つであります。

ところが、今健康を喪い病を養う身になりますと、人間にとつて一番幸福なものは健康の保持だといふことを、自分で痛感しております。だから今度の学長告辞、恐らく最後のものであると思う私の告辞に於ては、「諸君健かなれ」と祈りたいと思いません。が、病は必ずしもマイナスだけではないと思ふ点もありません。病の床に臥し、真夜中只一人床上に横たわつて睡られず、生と死との間をみつめてゐる時、ひそかに忍びよつて来るものは、神又は仏、つまり宗教の訪れであります。私は若い時から色々な種類の宗教に入りした経験をもつておりますが、なお修養の足りないためか、迷いから迷いへと浅ましくもさまざましております。しかし、宗教の絶対性だけは疑いもなく信じております。

最後に、諸君は健康さえ保てば、今後百年すなわち二十世紀の後半と二十一世紀の前半とを、逞ましく生きぬかれる恵まれた運命にあるので、切に諸君の自重自愛を望み、併せて諸君の前途に幸多かれと祈り上げます。

昭和三十三年三月二十日

(教授、法学博士)

(註、去る三月二十日学士証書授与式における告辞)

## 学長に

### 岡野留次郎教授

岩崎卯一前学長の病氣退職による後任学長は、去る三月二十二日(土)の連合教授会で選挙が行われた結果、三たび岡野留次郎教授(文学部)が選ばれ、同月二十六日(水)の理事会で任命と決定、四月一日付をもつて発令された。

### 岡野学長略歴

大正二年京都帝大文科大学哲学科に入り、初め桑木、朝永阿博士の下に主として純正哲学及び哲学史を専攻、桑木博士の東大転任後、専ら西田幾多郎博士の門下として新カント学派及び現象学派の哲学を研究、大正七年旅順工科学堂教授、同八年松山高校教授、同十年大阪高校教授として哲学概説、論理学、心理学及び英独語を講ずるかたわら専門の哲学研究を続け、昭和三年文部省在外研究員として、独乙フライブルヒ大学にてフツサールの指導を受け、またハイデッガーの斬新な学風と緻密な論理とによつて深い影響を受けて帰朝、昭和十年台北帝大教授として哲学及び哲学史講座を担当、文政学部長を歴任、其の間哲学的立場の確立と体系化を図り、幾多の研究業績を発表、同二十三年本学文学部教授及大学院兼任として、哲学及び哲学史を担当、昭和二十五年七月本学学長就任、同二十八年三月再選、同年十一月退職、また同二十八年五月文学博士号を受く。

## 入学式挙行

### 関西大学学部昭和三十三年度入学式

(新制となつてから第十一回目)は、四月十日(木)、一部は法学部、文学部が午前十時より、経済学部、商学部が午後一時より千里山第一学舎講堂で、二部は法、文、経、商各学部とも午後五時より天六学舎講堂においてそれぞれ挙行、また本年度より新設開講する工学部はその第一回入学式を四月十一日(金)午前十時より天六学舎講堂において挙行、いずれも岡野学長の告辞に続いて新入学生の宣誓が行われた。

なお、学校法人関西大学の設置する関係学校の入学式も左の通り挙行された。

四月十二日	午前十時	大学院
四月 五日	午前八時半	第一高等学校
四月 七日	午前九時	第一中学校

### 工学部新設開講

本学工学部は、学内外の要望に応え、また時代の脚光を浴びて、本年度四月一日より斯界の権威者や新進学者をスタッフに揃え、新しく開設、開講した。なお、開設学部は機械工学、電気工学、化学工学、金属工学の四学科である。

このため、三月八、九両日、四月一、二両日など入学試験を行つて、学生を厳選し、工学部門のすぐれた技術教育を施すことになつた。

## 初代工学部長に

### 田中晋輔教授

本年度より開設の工学部初代部長に田中晋輔教授が選ばれ、四月一日付にて任命された。

なお、部長代理には太田雞一教授が選ばれた。

田中工学部長略歴 大正九年京大理科大卒、京大講師、助教、大阪工業大教授、阪大教授(工学部)、工学部長歴任工学博士

### 経済学部長に

### 三谷友吉教授

経済学部長に新たに三谷友吉教授が選ばれ、四月一日付にて任命された。

三谷経済学部長略歴 東北大法文卒、関西高商部及商経学部講師、本学講師、経済学部教授、大学院兼務、経済学博士

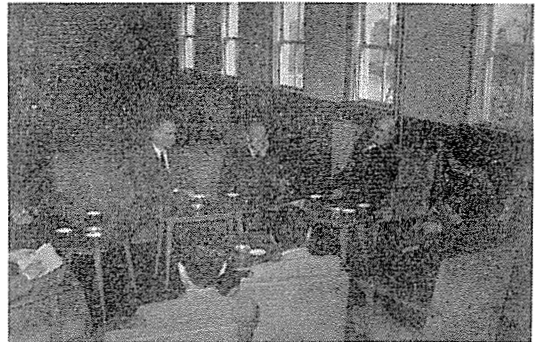
### 三木教授帰学

昭和三十三年度在外視察研究員として昨年十月渡仏した文学部三木治教授は、研究を終え、四月十一日羽田着、同十三日「つばめ」号で無事帰学した。

### ロツクフェアラ財団

### フアーズ博士来学

ロツクフェアラ財団人文科学部長C・B・フアーズ博士(Dr. Charles B. Fahs)



博士フアーズの談話

は、四月十六日(水)午後三時半来学、千里山大学ホールにて岡野学長などと主として大学図書館問題について懇談、意見を交換した。

## 人事異動

昭和三十三年二月二十六日付 専任講師 太田 雞一

本学教授に任じ工学部勤務を命ずる

昭和三十三年二月二十六日付 教授 太田 雞一

工学部長代理を命ずる

昭和三十三年三月十五日付 教授 壺井 義正

関西大学学長代理兼務を命ずる

昭和三十三年三月三十一日付  
教授 岩崎 卯一

願により学長の職を解く

昭和三十三年三月三十一日付

教授 壺井 義正

学長代理の兼務を解く

昭和三十三年三月三十一日付

教授 中川庸太郎

経済学部長を解く

昭和三十三年三月三十一日付

教授 河村 宜介

短期大学部長を解く

昭和三十三年三月三十一日付

教授 板橋 菊松

関西大学東京連絡本部長を解く

昭和三十三年三月三十一日付

教授 沢村 栄治

願により職を解く

昭和三十三年三月三十一日付

教授 太田 雞一

専任講師 山口 辰雄

同 加藤由治郎

同 橋田 慶蔵

同 角田 文雄

同 入江 深

同 宇田 米夫

同 佐伯 三郎

同 富山 忠三

短期大学部教授兼務を解く(以上同文)

昭和三十三年三月三十一日付

専任講師 鮫江 城夫

短期大学部助教兼務を解く

昭和三十三年三月三十一日付

専任講師 河合 信雄

短期大学部専任講師兼務を解く

昭和三十三年三月三十一日付  
嘱託 前田 春興

関西大学工学部設置会事務嘱託を解く

昭和三十三年四月一日付

教授 岡野留次郎

学長に任ずる

昭和三十三年四月一日付

教授 三谷 友吉

経済学部長を命ずる

昭和三十三年四月一日付

教授 板橋 菊松

関西大学東京連絡本部長を嘱託する

昭和三十三年四月一日付

教授 井上吉次郎

関西大学経済・政治研究所長を命ずる

昭和三十三年四月一日付

教授 森川 太郎

同 山崎 紀男

同 堀 堅士

同 辻岡 美延

同 伊沢 孝平

同 本大学教授に任じ法学部勤務を命ずる

昭和三十三年四月一日付

同 風巻景次郎

同 内藤 好文

同 目黒 三郎

同 本大学教授に任じ文学部勤務を命ずる

(以上同文)

昭和三十三年四月一日付

坂本弥三郎

本大学教授に任じ経済学部勤務を命ずる

昭和三十三年四月一日付

田中 晋輔

前田 春興

小川 雅弥

昭和三十三年四月一日付  
専任講師 原 英次

同 本浪 章市

同 寺尾 晃洋

同 本大学助教授に任ずる(以上同文)

昭和三十三年四月一日付

河崎平一郎

榎 悌次

本大学助教授に任じ法学部勤務を命ずる

(以上同文)

昭和三十三年四月一日付

石渡 俊一

友松 芳郎

松本 政治

本大学助教授に任じ文学部勤務を命ずる

(以上同文)

昭和三十三年四月一日付

田中 行雄

三上 達三

片山 佐一

亀井 清

本大学助教授に任じ工学部勤務を命ずる

(以上同文)

昭和三十三年四月一日付

助手 重田 晃一

同 佐藤 博

同 亀井 利明

同 来住 哲二

同 本大学専任講師に任ずる(以上同文)

昭和三十三年四月一日付

松本 暉男

本大学専任講師に任じ法学部勤務を命ずる

昭和三十三年四月一日付

赤井 養光

秋山 肇

木下 正俊

岸本 一郎

重本 利一

昭和三十三年四月一日付  
藤間常太郎

本大学専任講師に任じ文学部勤務を命ずる(以上同文)

昭和三十三年四月一日付

吉田 静一

本大学専任講師に任じ経済学部勤務を命ずる

昭和三十三年四月一日付

飯野 春樹

木村 滋

本大学専任講師に任じ商学部勤務を命ずる(以上同文)

昭和三十三年四月一日付

下間 頼一

太田 義一

川手 昭平

本大学専任講師に任じ工学部勤務を命ずる(以上同文)

昭和三十三年四月一日付

岸井 貞男

本大学助手に任じ法学部勤務を命ずる

昭和三十三年四月一日付

平野 健次

上村 弘雄

本大学助手に任じ文学部勤務を命ずる(以上同文)

昭和三十三年四月一日付

守谷 基明

神保 一郎

本大学助手に任じ経済学部勤務を命ずる(以上同文)

昭和三十三年四月一日付

杉本 昭七

本大学助手に任じ商学部勤務を命ずる

昭和三十三年四月一日付

並川 宏彦

今井 弘

井藤 一良

本大学助手に任じ工学部勤務を命ずる(以上同文)

昭和三十三年四月一日付

池田信之助

参事に任ずる

主事

# 日本におけるミルトン文献(Ⅰ)

天野敬太郎

これは、昨年末までに我が国で発表されたミルトン(John Milton, 1608-1674)の著作の翻刻と研究及びミルトン関係の邦人著作並びに欧人著作邦訳とを収めたものである。幕末、明治初期におけるミルトンの記事を掲載する文献については、豊田実著「日本英学史の研究」に収録の「ミルトン紹介研究の跡」に詳しく紹介されている。なお、本稿の不備な点は次の機会に補正したいので、御教示を賜りたく。

各項の順序は、大体発表順によった。

○は単行本である。

A ミルトンの著作

1. L'Allegro (1632)
2. Il Penseroso (1632)
3. Comus (1634)
4. Lycidas (1637)
5. Areopagitica (1644)
6. Paradise Lost (1663)

a. 原文・邦訳

b. 解説・梗概・画集

c. 研究

7. Paradise Regained (1671)
8. Samson Agonistes (1671)
9. その他
- B ミルトン関係文献
1. 書誌

2. 欧米人のミルトン評伝
3. 邦人のミルトン評伝

A ミルトンの著作

1 L'Allegro (1632)

[原文]○L'Allegro; Il Penseroso; Lycidas

研究社英文学叢書 竹友藻風註訳

[邦訳]「和楽の人」〔訳註〕(署名ナン)

日本英学新誌 第三一三〇号 明三三4

L'Allegro

○抒情英詩集(研究社) 中村為治訳 昭二9

[研究紹介]「イルメンセロン」

「ラングロ」 残 菊

○文学せり籠(河合文港堂) 明三6

Allegro, L' [邦文] (署名ナン)

○研究社英米文学辞典 昭三10

ラングロ

○世界文芸大辞典 第六卷 昭三11

「ラングロ」「イルメンセロン」に

就いて 沢田 卓爾

日本大学世田谷教養部紀要 第一号 昭三9

L'Allegro と Il Penseroso に就いて

(鏡影録一七の中) 杉本竜太郎

英語英文学評論と研究(版大) 第一号 昭元3

2 Il Penseroso (1632)

[原文]○L'Allegro; Il Penseroso; Lycidas

研究社英文学叢書 竹友藻風註訳

[邦訳]「沈思の人」〔評訳〕(署名ナン)

日本英学新誌 第三一三三号 明三7

[研究紹介]「イルメンセロン」

「ラングロ」 残 菊

○文学せり籠(河合文港堂) 明三6

ミルトンの「憂の人」イルメンセロン

の言ふ所如何 高橋 五郎

○神秘文学(昌文堂) 明三12

イル・メンセロン

○世界文芸大辞典 第一卷 昭二10

Penseroso, Il [邦文]

○研究社英米文学辞典 植田 虎雄

「ラングロ」「イルメンセロン」

に就いて 沢田 卓爾

日本大学世田谷教養部紀要 第一号 昭三9

L'Allegro と Il Penseroso に就いて

英語英文学評論と研究(版大) 杉本竜太郎

第一号 昭元3

3 Comus (1634)

[原文]○Comus and Lycidas.

(北星堂)

○Samson Agonistes and Comus.

繁野政昭註訳

研究社英文学叢書 昭四10

[研究社]二二七頁 四六判 昭四10

○邦訳○仮面劇コーマス 菱沼平治訳

丁未出版社一八五頁 四六判 大五12

○刷稿コーマス 菱沼東洲訳

丁未出版社一六九頁 菊半截 大八4

コーマス

英語青年自七二卷一〇号 萩原恭平訳註

至七四卷一〇号 昭九10―12

[研究紹介]コーマスを読みつてミルトンをおもふ

○仮面劇コーマス(菱沼平治訳)大三

○地に跡を印した人々(警醒社) 大15

○ミルトン失楽園物語(附、復楽園

物語、コーマス物語) 中山昌樹著

(婦人之友社)三三三頁 四六判 大五4

コーマス

○大百科事典(平凡社) 小暮 春雄

第九卷 昭七8

コーマス

○世界文芸大辞典 第三卷 昭二8

○研究社英米文学辞典 植田 虎雄

Comus [邦文]

○研究社英米文学辞典 昭三10

4 Lycidas (1637)

[原文]○Comus and Lycidas

(北星堂)

○L'Allegro; Il Penseroso; Lycidas

研究社英文学叢書 竹友藻風註訳

[邦訳]リンドラス

リンドラス からのちのや(乙骨三郎)訳

万年艸 卷第一 明三10

リンドラス(節操)

○泰西名詩名訳集(生田春月編)

越山堂 大八4

○同(資文堂)

○上田敏詩集 改訂増補版 大四4

リンドラス

リンドラス 河口真一訳 大三11

三田文学 第一五卷二号

ミルトンの「リンドラス」 河口真一訳

明星 第六卷一〇号 大四1

リンドラス

文教閣一七、三三、七頁 菊判 昭九4

○世界詩人全集(河出書房) 第一卷 昭三5

[研究紹介]Lycidas [邦文] (署名ナン)

○研究社英米文学辞典 昭三10

リンドラス

○世界文芸大辞典 第六卷 日夏歌之介

「リンドラス」と青年ミルトンの肖像 中桐 宣也

明治学院論叢 第二七号 昭四11

「リンドラス」を如何に読むかー文学  
的評價の問題 佐伯 彰一  
富山大学文学紀要 第二号 昭三11  
Lycidas 小論 佐藤 公子  
英米文学評論(東京女)第一卷一  
号 昭三10

Johnson の Lycidas 批評 柴崎 武夫  
英語青年 第100卷九号 昭三9  
Milton の "Lycidas" 研究 関谷 道子  
英米文学思潮(青山学院)学生論文集  
第二号 昭三3

u Areopagitica (1644)  
[邦訳] ○言論と自由(アレオパヂテイカ)  
上野精一、石田憲次、吉田新吾訳  
(新月社) 一四八頁 B 6 昭三6  
○言論の自由(アレオパヂテイカ)  
石田憲次、上野精一、吉田新吾訳  
岩波文庫 一三三頁 A 6 昭三3

出版の自由 山崎 正一訳  
○世界大思想全集(河出書房)  
哲学文学思想篇 8 昭三4  
[研究紹介] Areopagitica [邦文]  
(署名ナシ)  
○研究社英米文学辞典 昭三10  
Areopagitica の一解釈 斎藤 絹子  
英米文学評論(東京女)第三卷一  
号 昭三12

e Paradise Lost (1663)  
a 原文・邦訳  
○Paradise Lost 二冊 繁野政瑠註釈  
研究社英米文学叢書 大五10  
研究社英米文学叢書 昭三7  
○Paradise Lost. Book 1-2 二冊  
繁野政瑠註釈  
研究社小英米文学叢書 昭四9  
○Paradise Lost. Book 1  
尾島庄太郎註 昭三4  
(北星堂)

○教育根氏心理学 G・コムベーン原著  
応用 W・ベーン訳註、能勢栄重訳  
(金港堂) 五三、三三頁 四六判 明三3  
註一(四三三頁) ミルトン「失樂園」の  
一節の訳がある。

○失樂園 第一卷 内村達三郎訳註  
有楽社 一四〇頁 四六判 明三6  
呪咀の焰 入江雅次郎訳  
○ふる郷集 入江著 (文学同志会)  
明三12  
ミルトン失樂園 土井晩翠訳  
太陽 第三卷二二号 明元1  
註一第一卷第一三〇行の訳

○失樂園 始祖夫婦  
純愛の巻 内村達三郎訳註  
(健文館) 一八二、五五、四六判 明四10  
○ミルトン失樂園 (新生堂) 帆足理一郎訳  
上巻 四六頁 四六判 大五3  
下巻 四六頁 四六判 昭二4  
○ミルトン失樂園(岩波書店) 藤井 武訳  
上巻 二六頁 四六判 大五6  
中巻 五八頁 四六判 昭二1  
下巻 四六頁 四六判 昭二9  
同○藤井武全集(岩波書店) 第九卷  
上 四六判 昭六9  
中 二二頁 昭三7  
下 三三頁 昭三12

○失樂園 木内打魚訳  
世界文豪代表作全集 三三頁 昭二6  
○失樂園 上 安竹金治訳註  
(神戸、採日庵) (書第一編) 昭四9  
○失樂園 繁野天来訳  
世界文学全集(新潮社) 五三六頁 昭四12  
○同 新潮文庫 三三頁 昭三11  
上巻 三六頁 昭三11  
下巻 同 昭三11

○同 (大泉書店) B 6判 昭三8  
b 解説・梗概・画集  
青 峯  
盲詩人が失樂園 松霞子編 明三7  
○青年時文断片 明三7  
○文学時文断片 松霞子編 明三7  
田口 掬汀  
○宗教文学(新声社) 明三1  
○ミルトン失樂園物語 繁野天来編  
(富山房) 三四頁 明三3  
失樂園物語 内田 懐夫  
明星 卯歳第四号 明三4  
「失樂園」 松浦 政泰  
○代表的世界文学物語(北文館) 大2  
今井白楊(国三)著  
○失樂園物語 (実業之日本社) 大3  
○同 (上方屋出版部) 三三頁 大11  
註一原詩の散文抄訳  
パラダイス・ロスト 栗原 元吉  
○日本百科大辞典 第八卷 大六3  
○ミルトン失樂園物語、復樂園物語、コー  
マス物語 中山昌樹著  
(婦人之友社) 二二頁 四六判 大五4  
失樂園 馬場 孤蝶  
○世界名著解題(誠文堂) 昭二8

○ミルトン失樂園画集 ギュスタヴ・ドレエ画  
帆足理一郎解説  
(新生堂) 一〇〇頁 四六倍判 昭三2  
○同 春秋 社  
ミルトン「失樂園」 春 秋  
○思想名著解題(春秋社) 第二卷 昭五2  
失樂園 伊東勇太郎  
○英文学研究の道程(大同館) 昭七7  
失樂園 藤田徳一郎  
○大百科事典 第二卷 昭七10

失樂園 (署名ナシ)  
○国民百科大辞典 第六卷 昭二6  
○失樂園 豊田 実  
○世界文芸大辞典 第三卷 昭二8  
○世界名作縮刷全集(婦人公論  
附録) 昭三1  
Paradise Lost [邦文]  
○研究社英米文学辞典 野田 二  
失樂園の話 菊池 武一  
むらさき 昭四1  
失樂園 ○世界名著解題(春秋社) 第二  
卷 柳田 泉  
失樂園(名作紹介) 佐藤 清  
The Youth's Companion 第一卷 昭三2  
三三頁 昭三2  
「失樂園」 大和 資雄  
○英米文学名作概観(旺文社) 昭三5  
失樂園 平田次三郎  
○世界の文学(実業之日本社) 昭三5  
失樂園 毎日新聞社  
○世界の名著(毎日新聞社) 昭三8  
失樂園 平井 正徳  
○研究社世界文学辞典 昭元10

c 研 究  
ミルトンの魔王の壮美 斎藤 勇  
文明評論 第三卷一號 大五1  
「神曲」と「失樂園」の宇宙 黒田 正利  
芸 文(京大) 第一〇年八、二号 大八5  
「Paradise Lost」に於ける Satan の性  
格 斎藤 勇  
○岡倉先生記念論文集 昭三12  
「失樂園」の完訳 宮島新三郎  
世界文学月報 第三号 昭四11  
「失樂園」に就いて 繁野 天来



世界文学月報 第三号 昭四11

世界無二の史劇—ミルトンの大作

「失樂園」について 野口米次郎 昭四12

世界文学月報 第三号 昭四12

「失樂園」に就いて 土井 晩翠 昭四12

世界文学月報 第三号 昭四12

同(改題)ミルトンについて 土井 晩翠 昭四12

○雨の降る日は天気が悪い 田村 豊策 昭四12

「失樂園」全訳四篇の比較 昭四12

世界文学月報 第三号 昭四12

「失樂園」を読む人々に 竹友 藻風 昭四12

世界文学月報 第三号 昭四12

「失樂園」研究 繁野政瑠著 昭七11

○ミルトン「失樂園」研究 四六判 昭七11

「書評」 英語青年 第六卷三号 昭八15

Paradise Lost に描かれた God と Milton 竜村 孟雄 昭七12

大学英文学会会報 第三号 昭七12

○失樂園の詩的形而上学 岩橋武夫著 昭八5

(基督教思想叢書刊行会) 四三頁 菊判 昭八5

「書評」 マルコマン 第一巻三号 昭八11

Bentley の「Paradise Lost」 斎藤 勇 昭八7

英語青年 第六卷七号 昭八7

註—Paradise Lost. A New Edition by Richard Bentley. London 1732 の紹介

「Paradise Lost」に於ける悪の問題 宮西 光雄 昭九3

アルビオン 第一巻五号 昭九3

○ミルトンの「失樂園」 佐藤 清著 昭九6

英語英文学講座(新英米文学社) 三三頁 昭九6

Rowe's Debt to Paradise Lost. By George W. Whiting. (紹介) (署名ナシ)

アルビオン 第二巻六号 昭二〇5

「失樂園」に於ける「禁断の実」 須沼吉太郎 昭三12

英語学英文学論集(東京文理) 第五輯 昭三12

ミルトン「失樂園」初版 斎藤 勇 昭三2

書評 第三巻二号 昭三2

ミルトン「失樂園」(古代と現代I) 加納 秀夫 昭三3

基督敎文化 第二号 昭三3

失樂園の文化史的背景 小辻 節三 昭三9

経済系(学院) 第三・四輯 昭三9

Paradise Lost と Lost Horizon (文法演義) 大塚 高信 昭三9

英語青年 第六巻九号 昭三9

Two Devils: Comparison of Goethe's Faust and Milton's Paradise Lost. (英文) Alma McKenzie Wood 昭三9

西南学院大学論集 第三巻三号 昭三9

Milton の Paradise Lost の神話ギリシヤの意義 小倉 武雄 昭三9

山口大学研究論叢 第二号 昭三9

教育学部 昭三9

悪魔(Satan)の性格の創造 福田 民男 昭三9

広島大学文学部紀要 第二号 昭三9

The Early Reception of Paradise Lost 黒田健二郎 昭三9

(The Helicon(愛媛大学英文学研究室) 第三号 昭三9

Milton の simile—Paradise Lost を中心として 成瀬 正幾 昭三9

神戸商科大学紀要 第一号 昭三9

Satan in 'Paradise Lost' (英文) 玉木意志太 昭三6

英学(関大) 第一巻三号 昭三6

ウイリアムズと「失樂園」の構成 宮西 光雄 昭三3

英文学評論(京大) 第二輯 昭三3

ミルトンの「地獄篇」と「坑夫」 金子 健二 昭三4

○人間漱石(協同出版) 昭三4

ミルトンの為に弁ずる「失樂園」に現われた彼の宗教観の弁明 山本 協一 昭三9

立正文学部論叢 第六号 昭三9

7 Paradise Regained (1671) 岡田哲蔵 昭七8

〔邦訳〕復樂園(第一巻) 岡田哲蔵 昭七8

開拓者 第五巻十五号 昭七8

ミルトン「楽園回復」の一巻 岡田 哲蔵 昭七8

○英詩文の片影(新生堂) 昭七8

○復樂園 畔上賢造 昭二2

(改造社) 三三頁 四六判 昭二2

〔書評〕 アルビオン(京大) 第四巻二号 昭二9

秋元 実 昭二9

〔研究紹介〕○ミルトン失樂園物語、復樂園物語、コーマス物語 中山島樹 昭二8

(婦人之友社) 三三頁 四六判 昭二8

復樂園 藤田徳一郎 昭二8

○大百科事典(平凡社) 第三巻 昭二8

復樂園 畔上 賢造 昭二5

○世界文芸大辞典 第五巻 昭二5

Paradise Regained (邦文) 植田 虎雄 昭三10

○研究社英米文学辞典 昭三10

A Study of Paradise Regained 須沼吉太郎 昭二9

英語学英文学論集(東京文理) 第六輯 昭二9

A Commentary on Milton's 'Paradise Regained' (英文) 玉木意志太 昭三12

関西大学文学論集 第六巻二号 昭三12

8 Samson Agonistes (1671) 中村為治 昭九6

○闘技者サムソン 菊半蔵 昭九6

○闘技者サムソン 中村為治 昭九6

〔研究紹介〕Samson Agonistes に於ける希臘精神 秋元 実 昭一〇11

アルビオン 第三巻三号 昭一〇11

註—William R. Parker: The Greek Spirit in Milton's Samson Agonistes の紹介 西川 構 昭一〇11

Samson Agonistes' に於ける Symmetry 西川 構 昭一〇11

アルビオン 第三巻三号 昭一〇11

註—William R. Parker: Symmetry in Milton's Samson Agonistes の紹介 日夏耿之介 昭二8

サムソン・アゴニステス 昭二8

○世界文芸大辞典 第三巻 昭二8

Samson Agonistes (邦文) 植田 虎雄 昭三10

○研究社英米文学辞典 昭三10

Samson Agonistes; a Study in Milton (英文) 中桐 宣也 昭元10

明治学院論叢 第二号一輯 昭元10

On Milton's 'Samson Agonistes' (英文) ウィンズ・マサ 昭元

(佐世保商科短大) 研究紀要 第二集 昭元

Samson Agonistes' に於ける一考察 森安 綾 昭三

(関西学院) 論叢 第四号 昭三

Samson Agonistes—主題の心像とそ の本質 福田 民男 昭三

英語英文学研究(広島大学) 第二巻 昭三

Samson Agonistes' に於ける 蜂谷 昭雄 昭三

英米文学研究と鑑賞 第五号 昭三

(一〇〇〇)

9

# 昭和三十三年卒業論文題名(2)

## 文学部

源氏物語に於ける女性の分離	富岡 梅野	藤村と旅	和本 正之
西鶴小説	中川 毅	島崎藤村の詩集について	石橋昭一郎
横光利一著「上海」(附補遺論文「上海」に於ける本文移動)	中川 正昭	滑稽本の近世社会に与へたる笑の性格についての価値論的考察	海野 静治
井原西鶴論	中山 天勝	「吾輩は猫である」について	岡田 清
国木田独歩の小説	根来 寛次	太宰治の作品について	大谷 治
西鶴文学における女性観について	拝野 茂樹	荷風論	大谷 勤
平家物語の構成と構想	林 成起	芥川竜之介作品研究	岡村 謙
「笈の小文」鑑賞	平田 和夫	「萬葉仙栞枝歌考」	川村 一秀
西鶴の階級性と時代観について	平野 隆雄	「松尾芭蕉」研究	久保 礼三
私小説について	広瀬 正夫	西鶴の町人物について	小牧 清造
三島由紀夫	福田 義子	芥川竜之介	小谷 道雄
芭蕉出奔考(留別の句を中心に)	藤谷 三郎	樋口一葉とその作品について	齊藤 実美
西鶴、近松、秋成の座	前田 豊	文学に現れたる元禄町人の恋愛生活	佐伯 嘉久
井原西鶴、町人物論	松尾 壮一	—西鶴の作品を中心に—	塩山 弘
岸田国士論	正田 武弘	伊勢物語の文芸性	二葉亭四迷「浮雲」の研究
西鶴(作偽)世間胸算用	宮本 吉章	江戸時代に於ける東海道中膝栗毛について	白川 信夫
啄木の短歌革新の根拠について	吉岡 早苗	社会性俳句作家論	仲上 隆夫
「かのやうに」に現れた關外思想	吉田 剛	—戦後三十代俳句作家の問題—	
明暗論	吉田 佳春		

夏目漱石について(坑夫について)

藤田 亨

正秀考察 福持 康司

能楽盛衰考 牧野 完治

「暗夜行路」 前田 修二

—その成立をめぐる—

西鶴「世間胸算用」について 水谷 淳一

西鶴の町人物と近世社会 森田 貞夫

哲学科

ニーチエの「権力への意志」について 大沢 祥一

キェルケゴールにおける自己と不安 小川 九平

カント感性論の現象学的考察 佐藤 昭彦

Sociometry test の実験とその結果 西脇 義博

ベルグソンの形而上学における直感の方法について 水谷 清美

ヤスパースの限界状況と愛の闘争に就いて 中野 佳山

広告の前提となる心理学 松若 鉄雄

仏文学科

gnolière の "Don Juan" の研究 入江 隆

Guy de Maupassant について 大泊 智

スタンダール「バルムの僧院」に於ける恋愛論 小寺 秀司

アンドレ・ジイドについて(作品中より) 下村 益矢

Sur "Les fleurs du Mal" de Ch. Baudelaire 上念 弘

赤と黒に於ける恋愛の研究 佐藤 博

—その生涯及恋愛論の比較に於いて—

エミール・ゾテ「ナナ」 室 宏治

アルベール・カミュ著「異邦人」について 山本 智範

アポリネールの作品に表れたシュール・レアリズムについて 山本 久治

バルザックの谷間のユリ 大畑 一彦

独文学科

"Die Brant von Messina" について 須賀 洋一

ゲーテ作「若きヴェルテルの悩み」 渡辺 一正

江戸時代前期に於ける大名貸について

—喜宗の「相対法」に於ける過程—

イギリス労働運動史上の「暴動の時代」について 新井 晶子

鎌倉幕府政治の研究 井上 敏朗

律令時代の宗教 茨木 一成

近世封建社会に於ける商人意識について 大野 裕子

ルツターに結びついた社会的経済的要素について 衣川満洲男

幕末の階級闘争 久保 正和

—政治過程についての考察— 熊沢 徹郎

一九二六年前後の国共関係、中山艦事件をめぐる 倉野 恒夫

「近世農民対策に於ける五人組制度の研究」 小山 東洋

江戸時代の町人の生活と文化について 近藤 勝美

奈良時代彫刻に於ける旧山田寺仏頭的位置 齋藤 孝

明治初年に於ける農民暴動 特に徴兵制度との関係について 重山 弘

地租改正の一考察 志智 一志

趙匡胤伝稿 田中 重幸

キリスト教の伝来と長崎開港に至る宗教(キリスト教)貿易の歴史的発展段階について 宅磨 潔雄

近世封建社会における女性についての一考察 寺田 弘子

イギリス革命について一考察 寺原 順子

大塩の乱についての一考察 仲田 伸市

鳥取県中津部落の成立 初田 克介

江戸時代に於ける株仲間成立過程について 藤原 浩

阿波国租谷村に於ける支配形態について 藤原 徳正

本邦城郭特に高櫓と天主閣に於ける一考察 森本 哲也

和歌山城の起源について 山田 定男

徳川時代に於ける木綿の普及と庶民の衣服について 横田 義信

享保の改革と田沼政治について 吉田栄之助

近代日本女性史 和田 佑子

〃 栄養改善への努力〃

(近代栄養学に貢献した人々について)

江戸時代の貨幣制度とその社会的背景 米沢 佳子

景 河合 学

古代、中世の結髪について 釜崎 一之

江戸時代本末制度(成立とその意義) 高橋 修作

〓 新聞学科

「現代に於けるマス・コミュニケーション」の存在について 赤塚 裕

「一有り方と諸問題について」 日本の事業界に躍動を始めるP・R 足立 昌三

新聞の自由と良心 安倍 敏夫

新聞の自由と責任 頭谷 裕弘

広告の効果的方法について 池田 充孝

「特に静態的媒体」 整理のテクニク「表現とその魔性」について 石原 益史

整理記者三六五日の経験 マス・コミュニケーションの対象とその内容分析 伊豆島 泰

市場調査の役割と必要性について 稲葉 繁

新聞広告について 井上 清治

戦後我が国に於ける新聞の発達と読者への影響について 岩崎 哲博

新聞の犯す誤りについて 内田 恵子

現代マス・コミュニケーションの变化が大衆(青少年)に与える影響について 宇津野 宏

現代の広告ブームを更に拡大させているラジオ、テレビに就いて 大石 晶

マス・メディアとしての新聞の存在 大西 省三

新聞の変遷 大前 弘

雑誌広告の特長と効果について 大森 忠孝

新聞、広告に対する読者心理 岡村 清助

新聞ニュースと世論 岡橋 久敏

「Mass-communication」に於ける新聞広告 岡本 庄司

広告効果の測定について 小川 智且

商業新聞に於ける政治的中立性の限界 恩地 雨治

現代社会に於ける広告が大衆に及ぼす影響について 加藤 孝司

学生新聞 加藤 敏夫

マス・コミへの抵抗とその内部矛盾 加藤 総

マス・コミュニケーションにおける新聞の位置 神宇知通夫

広告宣伝に於ける一般的機能 岸井 宏行

マス・コミュニケーションに於ける我が国の機関紙活動について 北浦 康司

テレビに於けるマス・コミュニケーション ション 木村 孝彦

ラジオ、テレビに於ける考察 木村健一郎

我が国の商業放送の発展と民間テレビの将来について 限下 繁

マス・コミと諷刺について 久米 建寿

「放送に於ける考察」 社会主義社会に於けるマス・コミュニケーション 洪 性雲

新聞広告とその効果 光野 政朗

コミュニケーションに於ける言葉の影響性についての考察 河野 元信

我が国に於ける小売店のチラシと陳列について 郡山 博文

マス・コミュニケーションに於ける広告の位置 小谷 陽一

マス・コミの媒体に於ける倫理性について 小玉 悦夫

屋外広告の種類とその効果 小寺 正治

文学的文章と新聞文章 (新聞文章を中心として) 小山 邦弘

新聞広告の特質と欠点及び他の広告媒体との比較 近藤 博

広告放送における国語の音声的、心理的效果について 小島 昌一

「マス・コミと社会生活」近藤 昭夫

現在映画の批判宣伝とテレビによる影響について 坂井 満

新聞の伝達内容と反応について 芝田 明博

マス・コミュニケーションと流行 坂田 裕昭

現代の株式市場とマス・コミュニケーションの関連性 佐藤 一長

マス・ソサイエティと個人 沢 成晃

新聞紙法規の変遷下に於ける言論の自由と弾圧 沢登 千晃

週刊紙の行き方と見出しについて

首藤 敬

近年の代表新聞に於ける選挙報道の内容分析及び実践に関する研究

白石 輝光

「広告媒体としてのラジオの長、短所について」

杉山 恭英

マス・コミュニケーションと世論

高木 実

商業放送について

高谷 仁

マス・コミュニケーションと社会体制

高橋 泰弘

宣伝及び広告の美術化とその将来への期待

高村 紹一

新聞と名誉棄損

竹村 務

現在の広告(ラジオ、テレビ)

竹内 勝一

新聞広告の一般社会に於ける影響について

田中 隆

雑誌広告について

田中 弥夫

マス・コミュニケーションと現代生活の関連性

田中 裕

(主としてテレビ、ラジオ、新聞、将来のマス・コミの発達指標を基として)

田中 芳明

映画広告と倫理について

田中 健次

商業放送におけるラジオ番組と聴取者の結びつき

谷口 保人

マス・コミュニケーションとその媒体文化

為房 保人

新聞企業批判論

田矢 英嗣

―貨金における問題点とそのあり方―

マス・コミュニケーションの発達と将来性

千川 竜亮

名誉棄損を中心としての新聞記事とその責任

辻本 泰直

新聞の見出しに就いて

辻本 泰直

広告媒体の比較

植谷 達生

テレビ放送の発展過程とテレビ広告効果について

出口 武男

現代社会に於ける広告の役割とその重要性について

寺田 忠雄

新聞企業批判論

寺田 忠雄

―形態と特殊性―

寺西 義夫

テレビが及ぼす各種の社会影響について

富田 勝三

広告の影響を受ける各種の階層

富田 勝三

対決する映画と文学

中谷 政則

―シナリオとの関連―

中谷 政則

現代の広告のあり方と一般大衆に及ぼす影響

中塚 晴浩

新聞、ラジオに於ける医薬、化粧品広告と倫理について

中西 正一

新聞広告の宣伝方法とその効果について

長沢 芳一

新聞の指導性

成井 実

新聞に於ける諸問題について

成井 実

マス・コミュニケーションと政治

西川 正幸

広告媒体としての放送についての考察

西村 太一

映画が社会に及ぼす影響とその実態

西山 英敏

野崎 迪男

マス・コミの変化とその問題点について

野田 俊彰

広告が一般大衆に与える利益とその悪影響について

野村 全宏

広告媒体としての商業放送

野本 匡彦

世論の構造とその形成におけるマス・コミの重要性

橋本 厚美

新聞と名誉棄損について

橋本 厚美

近代社会における広告の意義と要件

橋本 厚美

ネオン・サインに就いて

花光 一郎

近代産業構造下に於ける広告活動と市場調査(商品市場)

花光 一郎

我が国に於ける新聞紙面の変遷

花光 一郎

Mass Communication に於ける広告の社会的利益について

格則 格則

新聞広告の効果的方法

格則 格則

現代新聞と大衆読者

格則 格則

マス・コミュニケーションと我が国農村社会について

格則 格則

「中学生の新聞接近とその理解度」

格則 格則

新聞の自由と責任

格則 格則

現代の新聞広告

格則 格則

大衆社会とマス・コミ

格則 格則

商業放送に於けるコマーシャルメッセ

格則 格則

イジの特質と欠点について

格則 格則

マス・ソサイテティーに於ける映画と群集心理

格則 格則

社会生活と新聞報道との関係

細川 幸市

テレビの出現と既存マス・メディアとの相互関係

前田 亮

色彩広告とムード広告との関連性と反射条件(連想)

前田 亮

テレビジョンの特質と影響

前田 亮

現代社会に於ける公共放送の在り方とその影響

丸山 為彦

マス・コミュニケーションとしての言論及び出版の自由の限界

丸山 為彦

新聞と読者

丸山 為彦

―新聞の影響と啓蒙性―

丸山 為彦

都市及び農村に於けるマス・コミュニケーションの構造とその比較研究

丸山 為彦

マス・コミュニケーションに於ける報道写真の諸問題

丸山 為彦

広告の影響を受ける各種の階層

丸山 為彦

商業放送(主としてラジオ)と広告について

丸山 為彦

広告の必要性と倫理

丸山 為彦

広告が一般大衆に及ぼす影響

丸山 為彦

新聞広告の現状について

丸山 為彦

マス・コミュニケーションに於ける公衆の構造と性質について

丸山 為彦



別表 I 求人状況年度別・月別一覧表

年度別	月別					
	10	11	12	1	2	3
昭和32年度	340	405	445	507	595	631
昭和29~31年度 平均値	160	226	260	307	371	425
昭和31年度	280	358	403	484	561	606
昭和30年度	157	198	240	298	363	426
昭和29年度	104	123	137	138	189	242

注=昭和32年度は3月15日現在、他の年度は3月末現在の調べによる。

とである。次いで先輩、知己、学校等に  
 対する就職相談の活用である。本年度も  
 採用試験の最終段階で学校への連絡を  
 怠つたため、涙をのんだ者があつたが、世  
 中の経験に乏しく不馴れた学生諸君が  
 先輩や経験者にいろいろと相談を持ちか  
 けて教えを乞うことに何んの遠慮躊躇が  
 いるうか。—又心構えとしては大企業  
 のみならず中小企業をもよく理解して「自  
 らの道は自ら飛込んで切り拓くのだ」と  
 いう決心も必要である。  
 その他勤務地が遠隔のため難渋の色を  
 示したり、職種を選び好みしてあたら切  
 角のチャンスを見逃したりすることも就  
 職に見放される原因となるであろう。要  
 は水準並の学力を持ち健康で明るい性  
 格、更には新鮮な若さと不屈の信念—こ  
 れだけのものを具備した人物は減多に見

〔別表 II〕 就職状況調査 (昭和33年3月15日現在)

学部	卒業 確定数	求職 者数	卒業後の方針が決まつた者				未就職 者数	就職率 %	就職確定せるものの内訳					
			進学	未就 職	届 職	就 職 確 定			大	中	小	官公	教育	その他
一 部	計	1,609	1,462	5	529	646	282	80.7	105	246	193	49	10	43
	法	579	529	3	194	232	100	81.1	27	100	58	28	6	13
	文	188	153		73	39	41	73.2	5	13	9	4	1	7
	経	535	497		154	252	91	81.6	47	88	83	13	2	19
	商	307	283	2	108	123	50	82.3	26	45	43	4	1	4
二 部	計	713	230		81	38	111	51.7	5	14	12	3	2	2
	法	292	90		39	10	41	54.4	1	4	4	1	0	0
	文	72	18		9	2	7	61.1	1	0	1	0	0	0
	経	243	89		25	20	44	50.6	3	9	4	1	2	1
	商	106	33		8	6	19	42.3	0	1	3	1	0	1
大学院	41	17		11	5	1	94.1	0	0	0	2	3	0	

- (註) 1. 求職者とは、卒業確定者の中、求職票を提出している者をいう。  
 2. 未就職とは、未就職調査を行った際届出がなく、公開試験又は推定によつて就職決定と認知し得るものをいう。  
 3. 就職率は、求職者数に対する卒業後の方針決定せるものの比率を表す。  
 4. 就職決定せるものの内訳で大は(資本金一億円以上)中は(同一億円未満一千万円以上)小は(同一千万円未満)の各企業分類を意味し、その他とは先の分類に入らないものと及び家業専従者を表す。

本年度校友会入会式は三月二十日(木)千里山第一学舎で学士証書授与式終了後開催された。  
 恒例を破り本年は和やかなビールパーティーをかねて行われ、大月会長以下役員多数が参列、坂本総務副部長が司会して開かれた。  
 まず大月会長が卒業に際して祝辞を送つたあと、校友会入会を祝す言葉をのべた。その他岡野、榎本、長柄三副会長らがそれぞれ挨拶し、一同新校友と共にビールで乾杯し歓談のち、学歌斉唱、母校校友会の前途に万才を三唱、盛會裡に幕を閉じた。

(15頁より)  
 当らないからどれでもよい一つでも多く身につける努力が大切—を以つて当れば必ず就職競争の勝利者となれることは間違いない。  
 最後に本学学生就職のためいつも並々ならぬ御尽力、御配慮を下さつた先輩校友並びに関係者各位に対し衷心より感謝の意を表します。在学生諸君もこれら諸氏の御協力御支援に甘んずることなく、日々勉学に努力すると共に、日々の生活態度を反省し、高邁な品格を自ら培うことに専念して貰いたい。そして結局これがやがて経なければならぬ就職への栄冠獲得の最も近い途である。



校友 バツ チ

校

友

### 校友会本部の動き

三月

今月の最大の行事は恒例の学士証書授与式後に行われる校友会入会式であった。例年の慣習を破り、今回は卒業と校友になることを祝福してビール・パーティーを兼ねて和やかな入会式を行った。その他一部校友会と新入学生から終身会費の予納を受ける件について文書交換、また卒業生代表らと入会勧奨等につき折衝がなされた。

- 三日 組織部—二部校友会懇談会・午後六時、天六学舎
- 六日 組織部—校友会懇談会・午後六時、天六学舎
- 八日 同懇談会・午後六時、天六学舎
- 九日 友粋会総会並びに物故者追悼会・午後二時、「浄国寺」及び「南地荘」・榎本副会長出席
- 十日 組織部—校友会懇談会・午後六時、天六学舎
- 十一日 京都支部総会・午後六時、「平安寮」・安井校友課長出席
- 十二日 部長会・正午、「老松」
- 同日 財務部会・午後五時半、天六学舎

十四日 組織部—学生ゼミナル代表との懇談会・午後六時、天六学舎

十五日 広報部、新聞「関大」第三十四号(三月号)発行

十七日 組織部—二部校友会懇談会・午後六時、天六学舎

二十日 校友会入会式・午前十二時半、午後三時半、千里山第一学舎

二十二日 組織部会・午後六時、「大方」

二十六日 校友会—校友会覚書交換・正午、「清交社」

二十九日 広報部会・午後六時、天六学舎

### 友 粋 会

卒業後二十年になる友粋会は三月九日(日)同期生の物故者追悼法要を兼ねて総会を開催。

当日はまず追悼法要を午後二時から、下寺町「浄国寺」で多数会員参列のもとに執り行い、改めて故人をしのびその冥福を祈った。この法要に校友会から榎本副会長も参列した。

そのあと郵政寮「南地荘」に於て、午後四時から総会を開催し、役員を改選しまた榎本副会長は種々と大学並びに校友会の現状について報告、説明を行った。会員一同、会席で乾杯、歓談のち散会した。

当日決定役員

会長 森田文一郎  
幹事 城下正行

前田光一 牧村恵司  
安田 悠 並川治郎 安藤博重  
島津徳三 森本 勇 和田秀一  
橋谷米吉

### 学生会と覚書を交換

校友会では組織部が中心となつて学生会と新入生の終身会費予納問題につき協議を重ねていたが、学生会側が新入生から終身会費を予納せしめることは必要以上の経済負担をかけ、また強制加入と思ひ込む惧れがあるとの見解を示したが、会館建設の問題等もあり、また終身会費を入学時であれば半額でよいとの利点もある点を考慮、あくまで任意予納とすることで括まり、三月二十六日(水)正午から清交社において覚書を交換したわけである。尚、今後はできるだけ懇談の機会を相互で持つよう努めることになり、来年度からの終身会費予納勧奨については事前に協議することになった。尚交換した覚書は次の通りである。

昭和三十三年度新入生より校友会費納入に関する覚書

校友会は本年度新入生より校友会終身会費の納入を希望し、その納入方法について学生会と協議した結果、次の様な結論を得たのでここに覚書を交換する。

一、学生会は校友会費予納制度について、その本質的性格と新入生の必要以上の経済的負担を考慮し基本的には了解しない。

二、本年度において第一次入学時における状態に鑑み、より以上の混乱と磨擦を避けるため方法的に次の解決策で一致した。

イ、第一次入学時のごとき入学手続き以前には校友会長名の趣意書はださず入学式後ガイダンス時に会費納入の任意性を強調するとともに学生会の意向を尊重した校友会長名の文書を配布する。

ロ、新入生より徴収した会費の運営については学生会の意向を尊重する。  
三、昭和三十四年度以降の新入生及び在学生よりの校友会費徴収制度に関して双方は近い将来、協議の機会を持つよう努力する

### 校友会入会式



第一学舎玄関での入会受付風景

(14頁下段)

# 關西大學七十年史

A5判 本文 七〇〇頁

資料編 一五四頁

口 絵 五七頁

特製上質紙使用

布クロス美装

函 入

## 内容目次

- 第一章 關西法律学校の創業
- 第二章 河内町興正寺時代
- 第三章 江戸堀時代
- 第四章 福島時代
- 第五章 福島、千里山時代
- 第六章 千里山及天六時代
- 第七章 新制大学の時代
- 資料編 (關西大學七十年史年表その他)

刊 行 關 西 大 學

關西大學法學會編著

## 岩崎教授在職三十五年記念論文集

(論文 四三九頁)  
 (年譜及目録 二五頁)  
 A5判 四六四頁  
 上製 布クロス函入  
 普製 フランス綴

## 内容目次

ヘーゲル・文化國家序説(池田榮) 政治学史の構成について(原英次) 政治社会学の構成について(上林良一) 法の一般原則と國際法の淵源(川上敬逸) 國民主權の意味(渡辺宗太郎) 地方自治のあり方について(中谷敬寿) インド憲法の特質(松田善) 工業所有權の侵蝕について(内田修) 日唐軍防令の比較研究(石尾芳久) 承継的従犯について(植田重正) 刑法における行為能力と責任能力(中義勝) 古代ローマにおける自力救済制限の辨別(明石三郎) ル・プリーの相統制度論(木村健地) ドイツ遺留分法の史的素描(福島四郎) 外國離婚判決の承認に関する英國國際私法規則(本浪章市) 商法の対象と商行為の实体(岩本慧)

刊 行 關 西 大 學 法 學 會  
 刊 行 取 扱 關 西 大 學 出 版 部

「關西大學七十年史」は、關西大學創立七十周年記念事業の一つとして企画されて以来、修史に、編集に、遺憾なきを期して着々進められていたが、この程完成をみましたことは御同慶に堪えません。

本年史御希望の方には実費(金壹千五百円(送料共))にて御頒布いたしますから何卒、大學出版部まで御申込み下さる様お願いします。

刊行取扱 關西大學出版部

## 貨幣資本論

元關西大學學長 正井敬次著 B6判 二七五頁  
 現同名譽教授、経博 フランス綴 定価二五〇円

貨幣及び貨幣資本の性質を知ることが、資本主義經濟の实体を理解するために必要である、という著者の思想に基いて、多角的に貨幣資本の諸問題を追求された労作である。

刊行及発売 關西大學出版部

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可  
 昭和三十三年四月三十日発行(毎月一回三十日発行)

關西大學學報 第三二四号

四月号

編集兼 久井忠雄 発行所 關西大學出版部

印刷所 大阪市中淀区長柄中通二丁目

電話 堀川(35)二〇七二番  
 振替 大阪(二六七)七二七番

株式 ナニワ印刷所  
 電話(35)七二七一